

# 小学校家庭科衣生活分野における 総合的な学びをめざす題材開発 (第1報)

— 教科書の記述内容と実施状況 —

杉村 桃子 (家政教育講座家庭科教育研究室)

綿引 伴子 (金沢大学) 上野 留美 (愛南町立城辺中学校)

(平成17年6月3日受理)

## Development of the Synthetic Study on Clothing Education in Elementary School (1)

: Investigation on Description of Textbooks and the Situation and the  
Issue of Clothing Education in Elementary Schools

Momoko SUGIMURA, Tomoko WATAHIKI and Rumi UENO

### 1. 緒言

昭和22年, 戦後の教育改革の一環として, 最初の学習指導要領(試案)が作成され, 戦時下の教育思潮を払拭し, 新憲法, 教育基本法の理念の具体化を図った。この学習指導要領の作成に伴い, 小学校において従来女子だけを対象にしていた裁縫や家事と異なる男女共に学ぶ教科として家庭科が設けられた。その後, 昭和33年の第2次改訂より文部大臣による公示という形をとり, 家庭科教科書における文部省検定制度は昭和36年より開始した。昭和36年当時, 小学校家庭科教科書は10社から教科書が出版されていたが, 昭和43年の第3次改訂に伴い, 開隆堂と東京書籍の2社のみからの出版となり現在に至っている<sup>1)</sup>。

小学校家庭科における衣生活教育に関する研究は, 田中による明治期の和裁教育や大正期・昭和初期における小学校裁縫科教育等<sup>2)～8)</sup>がみられる。教科書発行から現在に至るまでの小学校家庭科教科書の内容の変遷に関する一連的な報告は, 日本家庭科教育学会により, 家庭科教育50年の歩みを振り返って編纂された報告<sup>1)</sup>以外にはほとんどみられない。

衣生活分野の授業実践に関する研究では, 1946年から1993年までの授業実践については, 田結庄他により分析されている<sup>9)・10)</sup>。1990年1月から2003年12月までに家庭科教育関係雑誌に収録された授業実践については, 筆

者らが分析している<sup>11)</sup>。その結果から, 1990年代までは被服製作実習の実践報告が多かったことや, 2000年以降は, 消費者教育や「総合的な学習の時間」との関連がより高まってきたことなどが明らかとなった。また, 「総合的な学習の時間」の実践報告の中には, 綿花や藍, ケナフ等の栽培を題材とするものがみられ, 衣生活分野と「総合的な学習の時間」とを関連付けた学習が有効であることが示唆された。

しかし, 教科書題材についての考察や, 学校での実際の家庭科と「総合的な学習の時間」の実践を調査し, その関連性について研究した先行研究や実践報告はほとんどみられない。

そこで, 本研究では, 衣生活分野での総合的な学びを可能にする題材や, 衣生活分野と「総合的な学習の時間」を関連づけた題材を開発するための基礎資料を得ることを目的とする。小学校の家庭科教科書の記述内容を分析するとともに, 松山市内小学校での授業実践に関する質問紙調査を行い, 衣生活分野の授業実践内容から, 題材開発に必要な現状と課題を検討する。

なお, 学習指導要領平成10年告示以降, 「領域」の構成が改められたが, 本論ではそれ以前の学習指導要領に準じた教科書を多数取り上げるため, 便宜上統一して「衣生活領域」と表現することとする。

表1 調査対象とした教科書

検定年月	発行年月	対象年度	出版社	教科書名
昭和42年4月	昭和42年12月		開隆堂	「小学校家庭科」5年・6年
昭和45年4月	昭和45年12月		開隆堂	「小学校家庭科」5年・6年
昭和51年4月	昭和51年12月		開隆堂	「小学校家庭科」5年・6年
昭和54年3月		昭和58年度	開隆堂	「小学校家庭科」5年・6年
昭和54年3月		昭和58年度	東京書籍	「新訂 新しい家庭」5年・6年
昭和54年3月		昭和58年度	開隆堂	「小学校家庭科」5年・6年
		昭和61年度	東京書籍	「新編 新しい家庭」5年・6年
		昭和61年度	開隆堂	「小学校家庭科」5年・6年
昭和60年3月		昭和64年度	東京書籍	「新訂 新しい家庭」5年・6年
昭和60年3月		昭和64年度	開隆堂	「小学校家庭科」5年・6年
平成3年1月	平成4年12月	平成4年度	開隆堂	「わたしたちの家庭科」5年・6年
平成3年1月		平成4年度	東京書籍	「新しい家庭」5年・6年
平成7年2月	平成9年12月	平成8年度	開隆堂	「わたしたちの家庭科」5年・6年
平成7年2月		平成8年度	東京書籍	「新編 新しい家庭」5年・6年
平成11年2月	平成12年12月	平成12年度	開隆堂	「わたしたちの家庭科」5年・6年
平成11年2月		平成12年度	東京書籍	「新訂 新しい家庭」5年・6年
平成13年1月	平成14年12月	平成14年度	開隆堂	「わたしたちの家庭科」5年・6年
平成13年1月		平成14年度	東京書籍	「新しい家庭」5・6年

注) 発行年及び対象年度は記載されているもののみ表記した

## 2. 研究方法

### (1) 教科書の記述内容

表1に示す、昭和42年から平成13年に検定された小学校家庭科教科書34冊の、衣生活領域の学習内容及び題材内容を分析する。調査項目は、領域別掲載量、衣生活領域の記述内容、被服製作題材である。

掲載量の分析は、教科書・検定年ごとに教科書全体総頁数に対する、衣生活領域関連の記述・文章表現及び挿絵・写真、図表を行単位で総和を出し、一教科書あたりの衣生活領域関連掲載量割合を換算する。教科書全体を「衣生活」、「食生活」、「住生活」、「家庭生活」、「その他」の5領域に分類し、各領域の掲載割合を調べる。「その他」については、教科書内容をもとに「環境」、「消費者」、「応接と訪問」、「地域とのつながり」の4つに分類する。全体総頁数とは、教科書の記述・文章表現及び挿絵・写真、図表を含めたものである。ただし、巻頭資料・巻末資料などの部分は除外する。

衣生活領域については、過去の文献<sup>9)</sup>を参考に、小学校家庭科で取り扱われている内容から、「衣生活・着方」、「被服構成」、「被服材料」、「被服管理」の4分野に分類し、各学年別に衣生活領域全体に対する割合を求め、ただし、平成13年度文部省検定の「新しい家庭」

(東京書籍)については、第5・6学年で1冊の教科書として出版されているので、学校によってカリキュラムが異なることを考慮し、第5・6学年を区別せずに各学年において同数として集計した。

被服製作題材については、各学年での製作物の内容及び掲載数を調べる。

### (2) 松山市内公立小学校における授業実践に関する調査

衣生活領域における授業実践状況を調査するために、松山市内公立小学校の家庭科担当教師を対象に、質問紙調査を行う。調査項目は、教科書内容分析結果及び平成10年度改訂の小学校学習指導要領<sup>12)</sup>の内容をもとに、以下の5つの観点から作成した。質問内容の詳細を表2に示す。

①衣生活領域の学習内容や教材選択の実態、②家庭科担当教師の授業実践における工夫、③学習指導要領改訂に対する意見、④衣生活領域の他教科との関連、⑤「総合的な学習の時間」における指導の実態(地域とのつながりを含む)。

表2 質問紙調査項目

調査項目	質問内容
1.衣生活領域の学習内容や教材選択の実態	①今現在,使用している教科書は何ですか,また,発行年をお書き下さい, ②衣生活領域において教科書題材のどの教材に重点をおいていますか, ③被服製作では,何を製作していますか, ④製作実習で製作する小物は,教師が指定していますか,それとも児童に教科書等の中から題材を選択させていますか,
2.家庭科担当教師の授業実践における工夫	⑤教科書題材以外で,必要だと思う教材はありますか, ⑥衣生活領域の教科書題材以外で,実際に使っている題材はありますか,また,それを用いてどのような授業をしていますか, ⑦衣生活領域の授業をするに当たって,特に心掛けている指導上の留意点・工夫点等がありますか,
3.学習指導要領改訂に対する意見	⑧平成11年度学習指導要領改訂に伴い,衣生活領域において変更された点 がいくつかあります.下記の改訂された事項についてどのように思われますか, ⑨また,何か意見があればお聞かせ下さい,
4.衣生活領域の他教科との関連	⑩衣生活領域で,他教科や「総合的な学習の時間」等とクロスカリキュラムを組んで授業計画を立てている題材はありますか,
5.「総合的な学習の時間」における指導の実態 (地域とのつながり)	⑪第5・6学年で総合的な学習の時間において,衣生活領域以外で実践している 主な授業実践を各学年一つずつ教えて下さい, ⑫社会見学には,何年生に何の教科でどこへ行きますか,

調査対象は、愛媛大学教育学部附属小学校（2名）と松山市内の全公立小学校46校（各1名）の家庭科担当の教師48名であり、有効回収率は58%（28票）であった。調査は、2004年8月～10月に質問紙を配布または郵送した。

### 3. 結果と考察

#### 3-1. 教科書の記述内容

##### (1) 領域別掲載量

小学校家庭科教科書における各領域の割合の年代別推移を学年別（5・6学年）に表した。

第5学年については図1に示す。「衣生活」は、昭和42年版から60年版までは50%近くを占め、平成3年版から11年版までは減少したものの40%を占めていたが、13年版には約29%に減少した。「食生活」は昭和42年版から51年版までは約30%、54年版以降は約40%に増加し、一定の割合を占めていた。「家庭生活」は、昭和42年版から平成11年版まで、10%以下であったが、平成13年版では約14%となり、それ以前と比較して約1.5倍になった。「応接と訪問」は、昭和51年版まで教科書中に約8%を占めていたが、54年版以降には、「食生活」

の「お茶の頂き方」等に統合され、次第に掲載されなくなった。「環境」の学習内容は、昭和51年版までなかったが、54年版以降にはみられるようになった。ごみ問題を中心に記述され、平成11年版まで増加していた。「消費者」は、平成11年版までみられなかったが、13年版には約4%を占めていた。

第6学年については図2に示す。「衣生活」は、昭和42年版には教科書全体の43%を占めており、51年版までは掲載量が最も多かったが、年々減少し、平成13年版では25%まで減少したが、平成13年版には29%に増加した。「食生活」は、あまり変化がなく約4割であり、昭和45年版以降は掲載量が最も多い。「家庭生活」は第5学年と同様に、昭和42年版以降現在まで増加しており、平成13年版は約14%である。「環境教育」は、第5学年では、昭和54年版以降みられるようになったが、第6学年では61年版以降、学習内容として現れた。その内容は、第5学年と同様にごみ問題や生活廃水問題が中心である。「消費者」は、昭和42年版から60年版までは約3%で推移したが、平成3年版以降増加し平成11年版では1割近くを占めた。平成11年版では、「地域とのつながり」という学習内容で、「高齢者とのふれあい」や「外国人

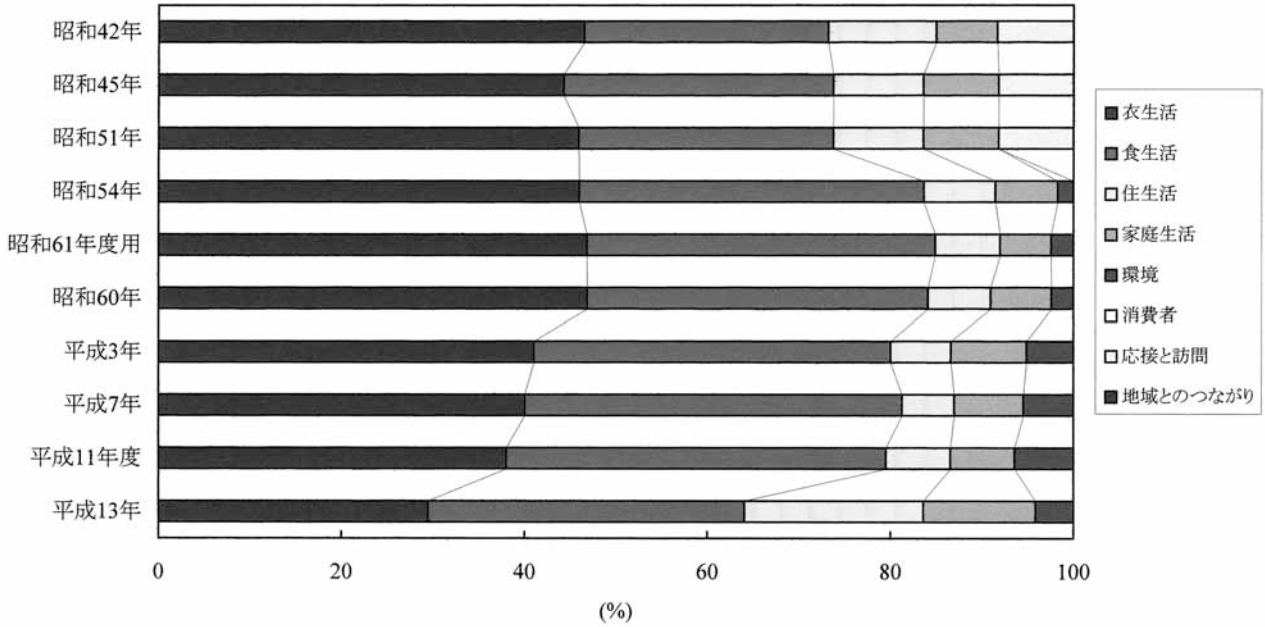


図1 領域分類の年代別推移 (第5学年)

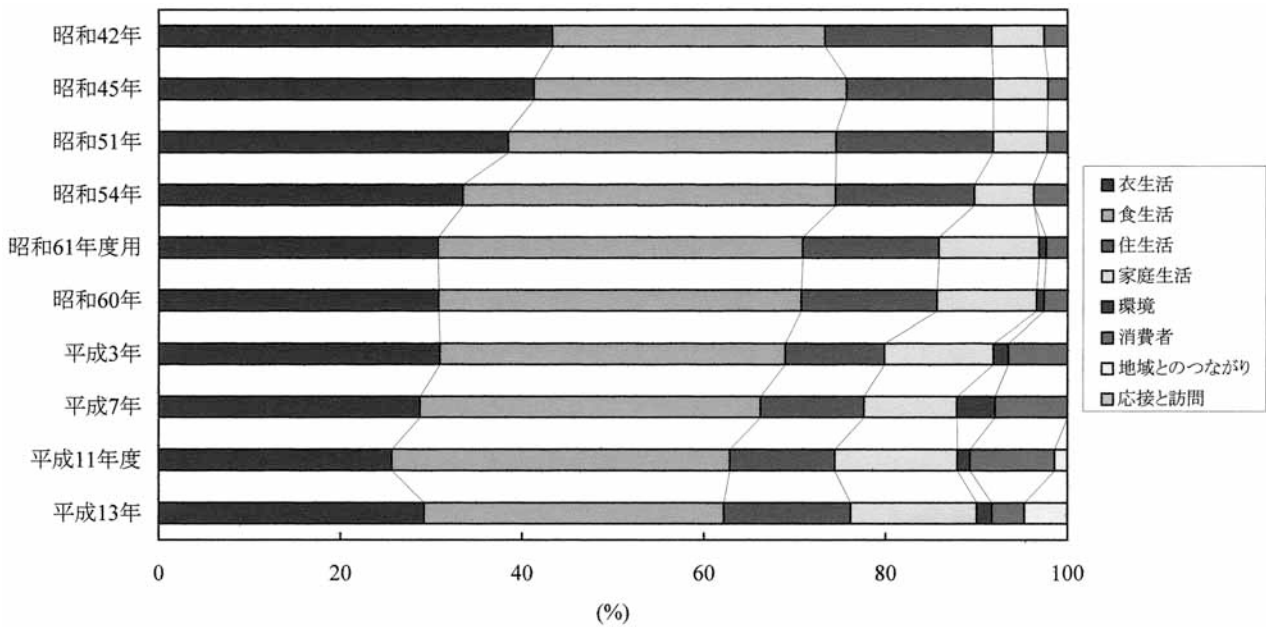


図2 領域分類の年代別推移 (第6学年)

との交流」,「清掃活動」などが取り上げられた。平成10年度改訂学習指導要領より新設された「総合的な学習の時間」の内容と関連する内容がみられた。

(2) 衣生活領域の記述内容 (各分野の割合)

衣生活領域における4分野(「衣生活・着方」「被服製作」「被服材料」「被服管理」)の割合の年代別推移を表した。

第5学年については図3に示す。「衣生活・着方」は、昭和54年版以降10%前後の増減を繰り返して推移してきたが、平成13年版では16%を占めるようになった。「被服製作」は、昭和51年版の57%を除いて、昭和42年版以降約7~8割で推移してきたが、平成13年版には60%に減少した。しかし依然としてかなりの割合を占めている。「被服材料」は、昭和42年版以降数%で、最も少ない。「被服管理」は、昭和42年版から平成7年版ま

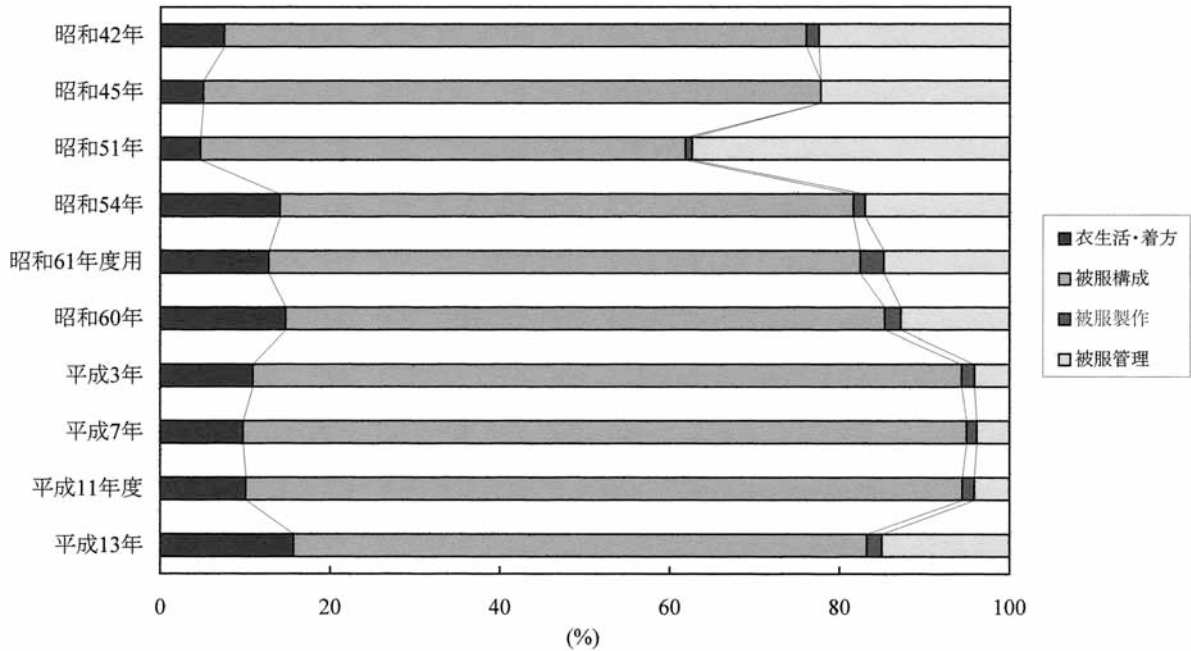


図3 衣生活領域における分野構成の年代別推移 (第5学年)

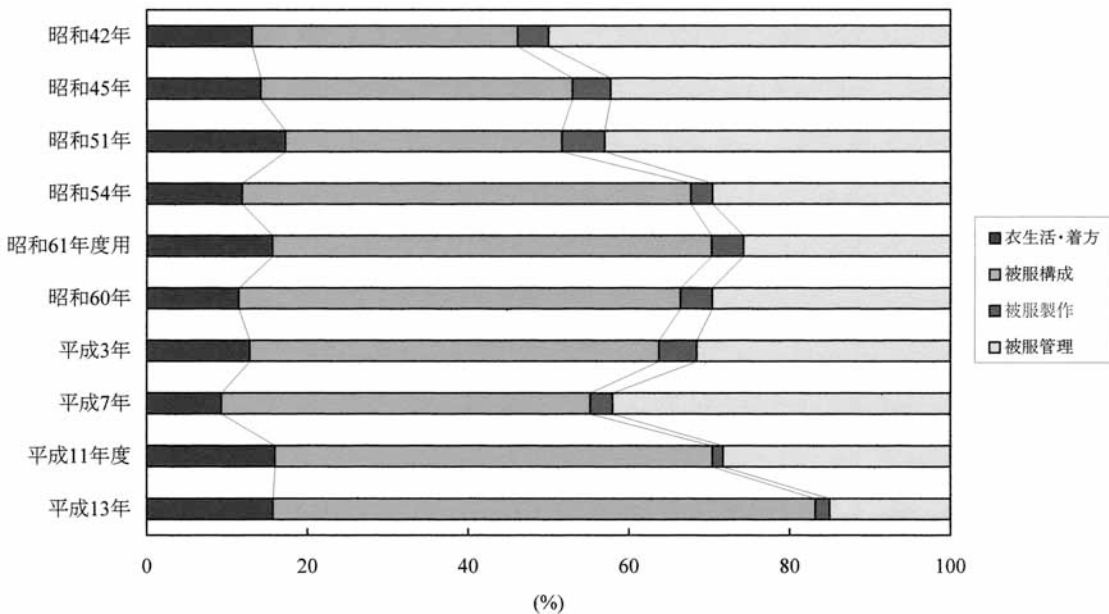


図4 衣生活領域における分野構成の年代別推移 (第6学年)

では減少傾向にあったが、平成11年版以降増加し、平成13年版には15%を占めていた。

全体的には、「被服製作」が依然として約7割を占め多いが、以前よりは減少しており、反対に「衣生活・着方」「被服管理」が増加している。

第6学年については図4に示す。「衣生活・着方」は、昭和42年版から平成3年版までは12~20%で推移してきたが、平成7年版では減少した。平成11年版と、第

5・6学年で1冊になったので正確な比較は出来ないが、平成13年版には増加し16%を占めた。「被服製作」は、昭和42年版~51年版までは35%前後、54年版~平成13年版は50~56%で推移してきたが、平成13年版には68%に増加した。「被服材料」は、昭和42年版以降最も少なく5%前後であるが、近年はさらに減少傾向にある。「被服管理」は、昭和42年版~51年版までは、教科書全体の約半分を占め、「被服製作」よりも多く取

り上げられていたが、それ以降減少し、平成11年版までは4割前後であった。内容は、洗濯を中心に、自分で衣服の管理及び実践できる力の育成が行われていた。

全体的には、「被服製作」が依然として6割を占め多い。第5・6学年で教科書が分かれていた平成11年版までは、次いで「被服管理」が4割近くを占めた。

第5・6学年を比較すると、いずれも「被服製作」の占める割合は圧倒的に多いが、第5学年のほうがより多かった。近年は、「衣生活・着方」は第5学年でより多く、「被服管理」は第6学年でより多く掲載されていた。

環境教育に関する内容としては、第5・6学年共に、「被服製作」に「リフォーム（再利用製作）」を取り上げ、着なくなったTシャツから、中に古布をつめてクッションを作ったり、使い古したバスタオルやおしぼりの回りを縫ってバスマットを作ったりする例が掲載されていた。

また、第5、6学年共に、本文では、「被服材料」に関する記述内容が僅少であったが、巻頭・巻末の資料中に図や写真で紹介されていた。内容は、第5学年では、「布地の成り立ち」として、布の表面を拡大した図や、「かんたんな織物」として、織物の成り立ちを毛糸で示した図であった。第6学年では、「洗剤量による汚れの落ち方」として、布地及び洗濯液の汚れの落ち方の変化や、「布地の種類の調べ方」として、綿・ポリエステル繊維の燃焼状態の写真等があった。

### (3) 被服製作題材

各教科書における被服製作題材を集計した結果を表3に示す。教科書は第5学年用16冊、第6学年用16冊、そのうち第5・6学年用2冊、計34冊である。

昭和42年版～平成13年版までの合計をみると、第5学年では、「ふくろ」が23件と最も多く、次いで「ボタン付け」18件、「縫いとり」15件、「ティッシュペーパー入れ」14件であった。

「ボタン付け」は、昭和42年版～平成13年版までの第5学年のいずれの教科書にもみられた。「ふくろ」は、平成3年版と7年版の教科書では取り上げられなかったが、それ以外の教科書では取り上げられていた。1冊の教科書に複数掲載されることもあった。「縫いとり」は、昭和54年版以降いずれでも取り上げられてきた。「ティッシュペーパー入れ」を含めた「小物」は、昭和54年版以降多数取り上げられるようになった。「小物」では、「ティッシュペーパー入れ」が14件で最も多く、次いで「小銭入れ」11件、「ふきん」5件、「くつみがきみトン」5件、「マスコット」5件、「ワッペン」5件であった。

第6学年では、「まくらカバー」と「つくろい・ほころび直し」が16件と最も多く、次いで「エプロン（前掛け）」15件、「ウォールポケット（壁掛け）」12件であった。

「まくらカバー」は平成7年版と13年版を除く教科書で取り上げられていた。「つくろい・ほころび直し」は、昭和51年版以前には、第5・6年両学年で取り上げられ

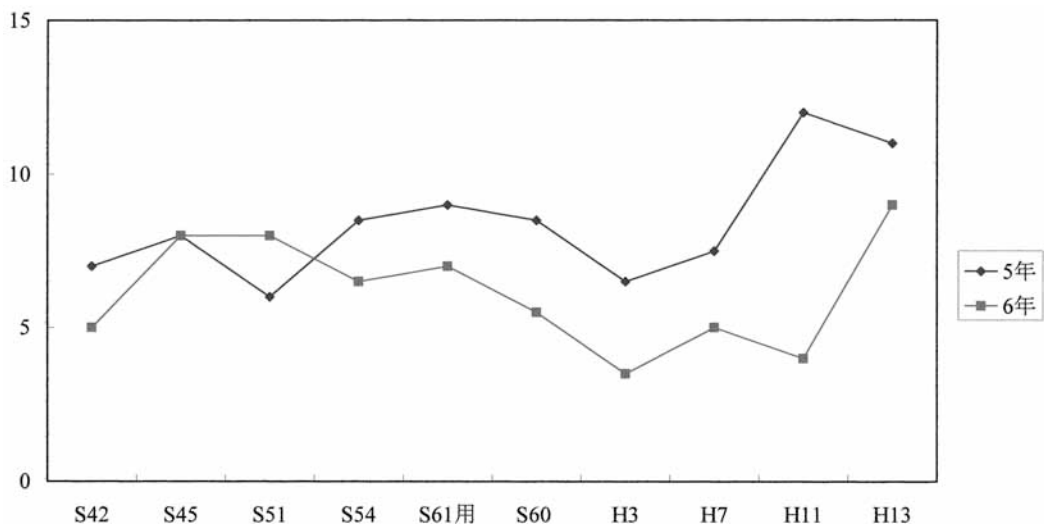


図5 教科書題材数の変遷



表4 被服製作での製作物(上位5位)

	第5学年 回答数125校(%)		第6学年 回答数106校(%)		合計 回答数231校(%)	
1位	ふくろ	17(13.6)	エプロン	17(16.0)	ふくろ	27(11.7)
2位	マスコット	12(9.6)	ティッシュボックスカバー クッションカバー	13(12.3)	エプロン	20(8.7)
3位	小銭入れ	11(8.8)	—	—	クッションカバー マスコット	18(7.8)
4位	ペンケース	10(8.0)	ふくろ	10(9.4)	—	
5位	ワッペン	9(7.2)	弁当つつみ	9(8.5)	ティッシュボックスカバー	15(6.5)

### 3-2. 松山市内小学校での授業実践に関する調査

#### (1) 衣生活領域の学習内容や教材選択の実態

##### ①重点をおいている分野

「衣生活領域において重点をおいている分野」について、「着方(衛生を含む)」、「製作(リサイクルを含む)」、「洗濯(手入れ・整理・整頓を含む)」、「その他」の4つに分類し、重点をおく順に1～4位の順位付けをしてもらった。なお、有効回答数は26校であった。

図6に示すように、指導に最も重点がおかれていた分野は、「製作(リサイクルを含む)」が80.8%(21人/26人中)、次いで「洗濯(手入れ・整理・整頓を含む)」が15.4%(4人/26人中)、「着方(衛生を含む)」が3.9%(1人/26人中)であった。「その他」については回答がなく、2校については無記入であった。

##### ②被服製作実習での製作物

「被服製作実習での製作物」に関する質問項目については、3-2(3)で述べた過去の教科書で取り上げられている製作物を選択肢として、実際に授業で製作している製作物を学年別に回答してもらった(複数回答)。

表4に示すように、第5学年では、「ふくろ」が13.6%(17件/125件回答)と最も多く、次いで、「マスコット」が9.6%(12件/125件回答)、「小銭入れ」が8.8%(11件/125件回答)、「ペンケース」が8.0%(10件/125件回答)、「ワッペン」が7.2%(9件/125件回答)であった。

第6学年では、「エプロン」が16.0%(17件/106件回答)と最も多く、次いで、「ティッシュボックスカバー」と「クッションカバー」が12.3%(13件/106件回答)、「ふくろ」9.4%(10件/106件回答)、「弁当つつみ」が8.5%(9件/106件回答)であった。

5, 6学年合わせた全体では、「ふくろ」が11.7%(27件/231件回答)と最も多く、次いで「エプロン」が8.7%(20件/231件回答)、「クッションカバー」と「マスコット」が7.8%(18件/231件回答)、「ティッシュボックスカバー」が6.5%(15件/231件回答)を製作しているとの回答であった。

以上より、第5・6学年とも教科書題材を中心に製作実習をしていることがわかった。中には、教科書題材ではない「OHPカバー」や「花瓶しき」等の回答もあり、現場教師の工夫による製作物の多様性がみられた。また、学校独自として、第6学年の卒業制作で、学校への寄贈品をグループ製作したり、野外活動での班のマークとして「ワッペン」を製作しているという回答があった。学校行事の中に被服製作を取り入れ、目的意識を持たせることで製作実習への動機付けを促している学校独自の取り組みが行われている。

##### ③製作実習の題材選択方法

「製作実習の題材選択方法」については、「教師が指定している」、「児童が選択している」、「それぞれの場合がある」の3項目を選択肢とし、回答してもらった。その結果、「児童が選択している」は44.8%(13件/29件)と多く、「教師が指定している」は6.9%(2件/29件)と少なかった。「それぞれの場合がある」は48.3%(14件/29件)であった。学年別に、第5学年では「それぞれの場合がある」、第6学年では「児童が選択している」との回答が1校あった。

題材別の選択方法については、「ナップザック」、「ウォールポケット」、「エプロン」、「クッションカバー」の4題材については、「教師が指定している」、「児童が選択している」、「それぞれの場合がある」、というすべて



に該当していた。「まくらカバー」、「花瓶しき」、「小物の自由製作」「ティッシュペーパー入れ」、「ショルダーバッグ」は、教師が児童の興味・関心を重視し、児童の自由な選択から製作されたものと考えられる。

製作実習における題材は、昭和42年以降、ほぼすべての教科書<sup>2)</sup>の掲載題材である「エプロン」や「ウォールポケット」のように、小学校段階での必要な基礎的技能が身に付き、生活に生かせる題材として教師が指定すべきものもあった。それに対して、現行小学校学習指導要領（平成10年）以降「布を用いて製作するものを考え、製作計画を立てること」との文言が記載され、題材指定がなくなった。今日では、児童の興味・関心に基づく学びをより推進するために課題選択を導入し、学習指導要領に基づいて製作実習が行われている様子が見えがえした。

(2) 家庭科担当教師の授業実践における工夫

「衣生活領域の教科書題材以外で必要であると感じる題材」については、回答は1校であった。それは、第6学年での「日本の伝統的な衣装、衣文化」という題材であった。これは、家庭科教育研究者連盟の実践報告書<sup>13)</sup>に「体を覆うものをつくる～貫頭衣～」とあるように、実践報告でもときどき紹介されている題材である。現行学習指導要領により新設された「総合的な学習の時間」と関連させた学習も考えられる。たとえば、国際理解教育の一部としての、衣生活に関する自国の伝統や文化の学習である。

他の教師は、教科書の学習内容を確実に身に付けさせることに注力していることがわかった。家庭科の授業時数が、第5学年では70時間から60時間、第6学年では70時間から55時間に大幅に削減され、教師は「現在の教科書題材以外の題材に特に必要性を感じていない」、もしくは「必要性を感じる題材があったとしても、大幅に削減された授業時間数の中では実践することができない」と感じていた。

「衣生活領域の教科書題材以外で実際に使っている題材の有無」については、回答がなかった。

「衣生活領域の授業をするに当たって、特に心がけている指導上の留意点・工夫点」については、「ある」が75.0%（21校/28校中）で、その内容は多様であった。

表5 「衣生活領域の授業をするに当たって、特に心がけている指導上の留意点・工夫点等」について

(複数回答可、有効回答数32、分類計57)

	回答数(件)	割合(%)
製作実習に関するもの	20	35.1
基礎基本の定着	7	12.3
家庭との連携	6	10.5
個別指導の重視	5	8.8
生活との関連付け	5	8.8
リサイクルに関するもの	4	7.0
作る喜び,楽しさ	3	5.3
インターネットの活用	2	3.5
洗濯,衣服の手入れ	2	3.5
個性を重視するもの	1	1.8
安全面	1	1.8
着方	1	1.8

自由記述回答をアフター・コーディングした結果を表5に示す。指導上の留意点・工夫点の内容は、「製作実習に関するもの」が35.1%（20件/57件中）と圧倒的に多く、次いで「基礎基本の定着」が12.3%（7件/57件中）、「家庭との連携」が10.5%（6件/57件中）であった。その他、「個別指導や児童の個性の重視」、「リサイクルに関するもの」、「インターネットの活用」など、現代の学校教育の中で重要視されている内容が衣生活領域の授業でも留意されていることがわかった。

「製作実習に関するもの」では、「教科書や資料を参考に、児童が作りたい物を選択し、見通しを持って取り組めるよう計画段階で助言している」、「6年生の小物作りでは、身の回りの不要になった衣服があれば、それから生活に役立つ小物作りをしている」などがあった。「基礎基本の定着」では、「基本の縫い方や、道具（特に針）の扱い方は徹底して指導している」「手縫い、ボタン付け等、基本的なことをしっかりと身に付けさせる」などがあった。「家庭との連携」では、「5年生の玉結びや玉どめなど、個別支援が必要な授業を参観授業にあて、保護者の協力を得る」などの回答があった。「技能習得カード」や夏休み等に「チャレンジカード」を作り、児童の授業外の家庭生活においての実践を促すという回答もあった。また、児童の実態が以前に比べると、技能面

での指導に時間がかかるようになり、一人ひとりの基本的な技能の定着を図るため、参観日を利用した保護者との協力やチーム・ティーチングの形態をとって指導しているという回答もあった。

衣生活領域の授業での指導上の工夫の仕方等は、学校により多少の相違がみられたが、各家庭科担当教師は、大幅に削減された授業時数の中で、児童の主体性を大事にしつつ、知識・技能を身に付けさせるために、学校や児童の実態に合わせた工夫を行っていることがわかった。

(3) 学習指導要領改訂に対する意見

衣生活領域における学習指導要領改訂に対する意見を調べるために、平成10年改訂により変更された6項目、「①『簡単な装飾』の削除」、「②『ほころび直し』の内容削除」、「③『日常着の選び方』の中学校への移行」、「④日常着の整理・整頓を『家族の生活と住居』の身の回りの整理、整頓に統合すること」、「⑤題材の設定を見直し、地域や学校、児童の実態に応じて題材や教材を選

択できるようにすること」、「⑥『生活に役立つ物の製作』では、指導内容に『製作する物を考え』の文言を付加し、児童が製作の課題を選択するようにすること」について、5段階評価をしてもらった。評価は、各項目について「大変賛成できる」「賛成できる」「どちらとも言えない」「あまり賛成できない」「賛成できない」(5～1)の5段階とした。1校のみ無記入であった。

最も評価が高かったのは「⑤題材の設定を見直し、地域や学校、児童の実態に応じて課題や教材を選択できるようにしていること」(平均値4.2)であった。次いで、「⑥『生活に役立つ物の製作』では指導内容に『製作する物を考え』の文言を付加し、児童が製作の課題を選択するようにしていること」は平均値3.9、「④日常着の整理、整頓を『家族の生活と住居』の身の回りの整理、整頓に統合すること」は平均値3.6であった。

「①『簡単な装飾』の内容削除」については平均値3.2、「②『日常着の選び方』の中学校への移行」は平均値2.9、「③『ほころび直し』の内容削除」は平均値2.7であった。この3項目については、家庭科担当教師の間

表6 「衣生活領域で、他教科や『総合的な学習の時間』等とクロスカリキュラムを組んで授業計画を立てている題材及び授業展開、成果や課題は何か。」について(回答1)

学年	第6学年	教科・時間	総合的な学習の時間
題材名	卒業プロジェクト～お世話になった方々～		
授業時間	22時間(総合16,道徳1,体育2,家庭2,図工1)		
学習のねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちで、よりよい卒業を創り出すと共に、充実した日々を過ごす。</li> <li>・仲間や先生との交流や思い出作りを計画,実行する活動を通して,感謝の気持ちを持ち,成熟感や感動を胸に卒業に臨む。</li> </ul>		
授業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション(2時間)</li> <li>・計画(3時間)</li> <li>・自分史づくり(3時間)</li> <li>・ビデオ鑑賞(1時間)</li> <li>・プレゼント,招待状作り←各学年へのプレゼント(色紙,花瓶しき)を作る(2時間)</li> <li>・謝恩会の準備(1時間)</li> <li>・6年生を送る会の練習(1時間)</li> <li>・謝恩会(1時間)</li> <li>・クラスマッチ(2時間)</li> <li>・学年お別れ会(2時間)</li> <li>・校舎そうじ,ボランティア(2時間)</li> <li>・タイムカプセル,記念樹(2時間)</li> </ul>		
成果・課題等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業までに自分たちでどんなことをしたいのか考え,話し合って計画を立てることにより,学習への主体的,創造的な態度が育ったこと。</li> <li>・計画をもとに,プロジェクトを実践することにより,課題解決の能力が育ったこと。</li> <li>・実践を通して得た成熟感や感動の気持ちを胸に,卒業や入学への決意を新たにすることができたこと。</li> <li>・ミシン縫いの技能を生かし,各学校で使ってもらえる花瓶しきを作る喜びを得たこと。</li> </ul>		

で意見の分かれるところであるようだ。前述の質問項目「衣生活領域の授業をするに当たって特に心がけている指導上の留意点・工夫点」に対する回答で、「児童自身のオリジナルのものとなるよう、装飾に工夫を凝らすように助言している」や、「『ほころび直し』や『日常着の選び方』を授業で指導している」という回答があったことから、教師によっては現在でも重要と思い指導している内容であると考えられる。

「上記①～⑥の改訂項目に対する評価以外の学習指導要領改訂版への自由記述内容」については、4校から回答があった。具体的には、「子ども達を取り巻く環境の変化や社会状況に対応した内容になっている」と改訂に対し肯定的な意見や、「授業時間数が減っているのに、問題解決学習をさせるというのは大変難しい。家庭科の時間内では、発展的な学習をする時間がない」という賛成しがたいという見解を示す意見があった。その他、「2ヵ年を見通しての題材の選択や工夫をして年間カリキュラムを立てることができるようになったが、5年→6年と継続してクラスを持ったり、家庭科学習に関わったりすることが少ない。そのため、1年限りの指導とな

ることが多いため、2ヵ年を見通した指導の工夫や重点化を図った指導が生かせられにくい現状である」、「5、6年の2年間で学ぶ内容となったため、学校裁量で単元構成はできるようになったが、子どもの立場に立つと、やはり全領域をそれぞれの学年で学習する方がよいと思うので、今までの教科書でも支障はない」など、学習指導要領のねらいと学校教育の指導の実態が合致していないという意見もあった。

#### (4) 衣生活領域の他教科との関連

「衣生活領域で、他教科や『総合的な学習の時間』等との関連でクロスカリキュラムを組んで授業計画を立てている題材及び授業展開とその成果や課題」については、28校中3校(10.7%)からの回答があった。3校の題材名及び学習のねらい、授業内容、授業の成果・課題等について、表6～8に示す。

授業内容は、2校(回答1, 回答2)は「卒業」に関するもの、1校(回答3)は「福祉」に関するものであった。回答1(表6)は、自分史づくりや謝恩会、クラスマッチ、学年お別れ会、校内そうじ、タイムカプセル、

表7 「衣生活領域で、他教科や『総合的な学習の時間』等とクロスカリキュラムを組んで授業計画を立てている題材及び授業展開、成果や課題は何か。」について(回答3)

学年	第6学年	教科・時間	総合的な学習の時間
題材名	感謝の心を伝えよう		
授業時間	9		
学習のねらい	・お世話になった身の回りの方々に感謝の心を込めて、生活に役立つものを送る。		
授業内容	・お世話になった方々について話し合う。(1時間) ・何を製作して送るのかを決める。(1時間) ・製作する。(6時間) ・感謝の心を手紙に表現する。(1時間)		
成果・課題等	・年間の総まとめの活動としては、卒業を間近に控えて、適切な内容であった。 ・発展的な学習として、既習事項が生かされた。 ・一人ひとりの個性や思いが生かされた。 ▲ 製作時間に個人差があるので、支援の在り方を検討しておく必要がある。		

表8 「衣生活領域で、他教科や『総合的な学習の時間』等とクロスカリキュラムを組んで授業計画を立てている題材及び授業展開、成果や課題は何か。」について(回答2)

学年	第5学年	教科・時間	総合的な学習の時間
題材名	共感的理解の旅		
授業時間数	4		
学習のねらい	・福祉施設訪問時に、プレゼントとして手作りのストラップやマスコットを作る。		
授業内容	・各自、家から古布やビーズなどあるものを持ち寄り、手作りする。		

記念樹などを含めた「卒業プロジェクト」の一部として、ミシン縫いの技能を生かし手校内の花瓶しきを作成する実践である。回答2（表7）は、お世話になった方々に感謝を込めて生活に役立つものを製作し手紙とともに贈る実践である。回答3（表8）は、家から布やビーズなどを持ち寄り、小物のプレゼントをつくり福祉施設を訪問する実践である。3題材の共通点は、贈り物としての被服製作であること、いずれも授業の一環として行っていたということであった。被服製作は、普段の学校生活や他教科とのクロスカリキュラムとして取り入れられやすいのではないかとと思われる。これらの授業の成果としては、被服製作授業での既習の内容が活かされることや、被服製作を通して一人ひとりの個性や思いが活かされることが挙げられていた。しかし、被服製作授業では製作時間に個人差が現れてしまうため、教師側の支援の在り方を検討する必要があるとの課題を挙げた学校もあった。

(5) 「総合的な学習の時間」における指導の実態

家庭科を行う第5・6学年の「総合的な学習の時間」での授業内容を自由記述で回答してもらった（表10）。その回答をアフター・コーディングしたものを表9に示す。

表9に示すように、第5学年では、「環境に関するもの」が最多で、30.8%（8件/26件）を占めた。次いで、「家庭科と関連するもの」と「栽培に関するもの」が

26.9%（7件/26件）であり、「家庭科と関連するもの」には、すべて「栽培」が含まれていた。このことから、松山市内小学校での「総合的な学習」の時間では、米や野菜などの栽培を通して、食生活領域と関連させた学習を行っている学校が多いことがわかった。

第6学年では、「国際理解・国際交流」と「卒業に関するもの」がともに23.5%（4件/17件）と最も多く、次いで、「平和に関するもの」と「福祉に関するもの」が11.8%（2件/17件）であった。第5年とは異なり、「平和に関するもの」や「歴史・文化に関するもの」など、第6学年の社会科と関連のある内容があり、家庭科以外の他教科とを関連させた回答があった。また、第6学年でも、「家庭科に関する内容」は1件あったが、第5学年で多かった「栽培」ではなく、食生活領域を健康や生活習慣病等と関連させた授業内容であった。

第5・6学年全体では「環境に関するもの」が約20.9%（9件/43件）と最も多く、次いで「家庭科と関連するもの」が約18.6%（8件/43件）、「栽培が含まれるもの」が約16.3%（7件/43件）であった。また、「家庭科と関連した内容は総合的な学習の時間で取り扱っていない」と記入し、無回答が1あった。

以上より、「総合的な学習の時間」では、学習指導要領にも明記されている「環境」、「国際理解」、「福祉」等の内容が主に実践されてた。これらに加え、家庭科の衣生活領域や食生活領域と関連した内容や、「卒業に関するもの」や「1年生との交流」などの学校行事と関連性

表9 「5・6年の『総合的な学習の時間』において、衣生活領域以外で実践している主な授業実践」について  
第5学年:回答数26(件),回答者21(人),第6学年:回答数17(件),回答者17(人)

授業内容	第5学年		第6学年		合計	
	(件)	(%)	(件)	(%)	(件)	(%)
環境に関する内容	8	30.8	1	5.9	9	20.9
家庭科と関連する内容	7	26.9	1	5.9	8	18.6
栽培が含まれる内容	7	29.9	0	0	7	16.3
国際理解・国際交流	1	3.9	4	23.5	5	11.6
卒業に関する内容	0	0	4	23.5	4	9.3
福祉に関する内容	2	7.7	2	11.8	4	9.3
生命尊重・健康	1	3.9	1	5.9	2	4.7
平和に関する内容	0	0	1	5.9	1	2.3
他学年との交流	0	0	1	5.9	1	2.3
地域とのつながり	0	0	1	5.9	1	2.3
歴史・文化	0	0	1	5.9	1	2.3

表10 「5・6年の『総合的な学習の時間』において、衣生活領域以外で実践している主な授業実践」について  
第5学年:回答数26(件),回答者21(人),第6学年:回答数17(件),回答者17(人)

対象学年	題材名	時数	授業内容
5	「世界は友達」	2	・外国人との交流会で、外国人の方が国の料理を作ってくれた。 ・日本の食べ物を紹介する目的で白玉だんごを作った。
5	「作ろう(学校名)のハリアフリー」	40	・福祉的なもの
5	「次の地球の一秒を救うのは私たちが」	週4	・生活から出るごみ、排水を少なくする方法を考える。 ・生活を見直し、どのように工夫するか考える。 ・実践活動を行う。
5	「チャレンジ 省エネ (この中で、3時間 「エコクッキング」)	全40	・エコクッキングってどんなことだろう。 ・食材を無駄なく使い、ガスを節約して料理をしよう。 ・試食後、洗剤や水を節約して後片付けをしよう。 ・実習して分かったことや感想をまとめよう。
5	「食べ物から命を見つめよう」	35	・野菜を育てる。 ・校区にある高校の調理科の生徒と一緒に野菜サラダを作る。 ・無人市を開く。
5	「自由研究に取り組もう」	46	・全員ではないが、お菓子作りを題材として選んだ児童は店を見学したり、本やインターネット等で資料収集した後、お菓子作りの実習に取り組み発表会を行ったりした。
5	「自然の学校に行こう」	30	・(自然の学校)5日間の企画や活動内容を考える。 ・自然の学校で5日間、自分や仲間や自然と向き合って生活する。
5	「野外活動を成功させよう」	15	・野外活動の計画やしおり作り(その中で、ご飯の炊き方やカレーの作り方等を調べる。)
5	「米作りに挑戦しよう」	16	・バケツ稲を育てる。「米作りについて調べよう」や「お米のすばらしさを見つめよう」の題材と関連して、年間を通して米について考えていく。
5	「環境について考えよう」	20	・リサイクル
5	「(学校名)の環境チェックをしよう」	10	・環境の観点で校区探検をして、よいところや問題点を見つける。 ・見つけたことの中から自分のテーマを決め、追求する。(ゴミ、よごれ、緑、草花、川の様子、生き物等)
5	「米作りにチャレンジ」	10	・田植えや稲刈りの体験を通して、稲の生長や農作業への関心を持ち、収穫の喜びを味わい、米作り体験をさせて下さった地域の人たちに感謝の気持ちを持つ。
5	「体験訪問をしよう」(福祉)	10	・課題別グループで福祉施設や障害のある人との交流の計画を立てる。 ・実際に訪問し、交流を深める。 ・訪問後に情報交換を行う。 ・手紙等で交流を続けていく。
5	「今日も“ごはん”がうまい」	60	・オリエンテーション ・学習課題の検討、設定 ・体験活動(田植え→稲刈り、味噌作り→味噌料理) ・中間発表会 ・体験活動(もち米を使って) ・学習のまとめ ・感謝祭
5	「環境について考えよう」 ～ごみ処理～	2	・ごみの現状、ごみの分別の仕方を学ぶ。 ・廃品を利用して生活に役立つ物を作る。
5	「プロジェクト～見つめよう お米のよさ～」	6	・総合の米作りと米を用いた郷土料理
5	「命について考えよう」 (生命尊重)	32	・生命の誕生について知る。 ・命の大切さを知り、命を守っていくためのあり方について一人ひとりの課題を持ち調べ学習をする。 ・衣食住に大きく関わっていることに気づき、新聞にまとめたり、発表会をしったりする。
5	「バケツ稲を作ろう」	21	・田植えまでの作業をしよう。(種もみ選び、苗代作り、しろかき) ・田植えをし、育つ様子を観察しよう。 ・収穫→試食→記録をまとめる
5	「環境調査隊」	35	・身近な環境問題について自分の課題を決める。 ・出前環境教室を開き、環境問題の現状を知る。 ・課題について調べる。(ゴミ、大気汚染、水質汚濁、エネルギー等) ・分かったことをまとめ、発表する。 ・環境を守るための提案をする。
5	「ぼくらのエコアップ大作戦」	18	・環境を守るために私たちができることを考える。(川の水を汚さない方法、二酸化炭素や排気ガスを減らす方法、ゴミを減らす方法、自然を守り、生物が住みやすい環境について) ・考えた方法を分かりやすくまとめ、発表する。 ・自分ができする方法でエコチャレンジをする。 ・まとめと報告会をする。
5	「米・こめ活動」	約60	・米の栽培(もみ選び～精米) ・米の栄養 ・日本食のすばらしさ ・世界の米作り

6	「めざせ 国際人」	35	・国際交流の中の国際理解的なもの
6	「共に生きよう」	週4	・お年寄りとの交流について考える。 ・一年間の触れ合いを振り返り、心に残るお別れ会の計画を立てる。 ・プレゼント製作をして、楽しくお別れ会をする。
6	「卒業プロジェクト～お世話になった方々～」	全22 道1 体2 家2 図1	・オリエンテーション(2時間) ・計画(3時間) ・自分史づくり(3時間) ・ビデオ鑑賞(1時間) ・プレゼント、招待状作り←各学年へのプレゼント(色紙、花瓶しき)を作る(2時間) ・謝恩会の準備(1時間) ・6年生を送る会の練習(1時間) ・謝恩会(1時間) ・クラスマッチ(2時間) ・学年お別れ会(2時間) ・校舎そうじ、ボランティア(2時間) ・タイムカプセル、記念樹(2時間)
6	「平和とは」	35	・広島と原子爆弾の事実を知り、自分の課題を決める。 ・広島から学ぼう—課題の追求(調べ学習、修学旅行) ・全校に伝えよう—発表会をする。
6	「一年生と交流しよう」	13	・一年生との直接的な関わり合いを通して、自他の文化の違いを理解したり、相手のよさを発見したり、自分の認識を改めたりしながら、よりよい活動を創造していく。
6	「卒業プロジェクト」	20	・卒業プロジェクトの一つとして、地域のゴミ拾い等
6	「卒業までのカウントダウン」	—	・気持ちよく卒業していくために、何をしたいか、また何ができるかを考え、計画を立てて実践する。(お世話になった人へ感謝の気持ちを込めてタオルハンガー等の製作も行う。)
6	「世界中平和になれ! part3 国際理解編」	10	・外国人、体の不自由な人との交流を通して、共生社会21世紀にたくましく生きる日本人、国際人としての資質の基礎を養う。 →ボランティア体験をする。 興味のある国について課題追求する。 できれば、調べた国の人と交流会をする。
6	「いのち輝いて～手をつなごう世界の仲間たち～」	25	・国際理解教育の中で、取り上げた国の食文化について調べたり、代表的な料理を調理したりする時間を持つ。
6	「地域の人に学ぶ」	—	・地域にいるいろいろな分野の名人を訪ね、仕事の様子を見せてもらったり、質問したりするために情報を集める。 ・それぞれ名人の家へ行き、教えていただく。 ・学んだことをまとめ、情報交換を行う。自分のこれからの生き方に生かす。
6	「世界の人々と触れ合おう」(交流の時間)	3	・外国人との交流の中で外国の料理を実際に作り、ともに食する。 ・日本の料理を紹介する。
6	「チェック!わたしの食生活」	14	・一食分の食事(家庭科) ・小児生活習慣病の予防(保健体育)(総合的に扱う) ・バランスよく食べよう(特活)
6	「石手川を見つめて」(環境教育)	10	・石手川の水質調査をして現状を知る。 ・石手川を美しくしていくために一人ひとりがどのようにすればいいのか課題を持つ。 ・課題を解決していく。 ・調べて分かったことを新聞などにまとめて発表会をしたり、地域に発信したりする。
6	「高齢者福祉について考えよう」	28	・敬老の日について調べよう。 ・福祉施設とはどんなところだろう。 ・自分たちもお年寄りになってみよう(インスタントシニア) ・自分たちにできることを考えて、お年寄りと触れ合おう。 ・報告会をし、自分達にできることを実践しよう。
6	「未来に向かって」	20	・6年間の締めくりになる課題を見つける。 ・自分史を作る方法を決める。 ・自分史を作る。(過去、現在、未来) ・発表会を行う。
6	「私たちの歴史や文化に目を向けよう」	20	・世界にはどのような国があるか調べる。 ・日本の歴史や文化について調べる。 ・日本の伝統文化を体験する。(能、水墨画、生け花、茶の湯)
6	「健康ってすてき」	—	・自分の体について知ろう ・生活習慣病について 健康な体つくりのためには

表11 「社会見学へ行く場所」について

回答数99(件)

学年	1位		2位		3位	
第1学年	町探検, 公民館, 児童館	1	—		—	
第2学年	町探検	1	—		—	
第3学年	ボンジュース工場	6	町(校区)探検	5	消防署, スーパーマーケット	3
第4学年	浄水場	8	クリーンセンター	7	子規記念博物館	3
第5学年	放送局	6	中予水産試験場	5	工場	4
第6学年	考古館	3	埋蔵文化センター	2	生涯学習センター, 史跡, 古墳もも畑, 工場	1

のある内容が実践されていた。家庭科に関連した内容では、米や野菜などの栽培や健康に関連した内容、被服製作を取り入れた内容がみられた。

#### (6) 社会見学

学校と地域とのつながりを調べるため、「社会見学は、何年生・何の教科でどこへ行っているか」と尋ねた。回答は、複数回答を可能とした。回答数は99件(第1学年3件、第2学年1件、第3学年26件、第4学年39件、第5学年20件、第6学年10件)であった。見学場所については、各学年別の上位3位を表11に示す。

第1学年では、「町探検」、「公民館」、「児童館」、第2学年では「町探検」がそれぞれ1件であった。第3学年では、「ボンジュース工場」が6件と最も多く、次いで、「町(校区)探検」が5件、「消防署」と「スーパーマーケット」それぞれ3件であった。第4学年では「浄水場」が8件と最も多く、次いで、「クリーンセンター」が7件、「子規記念博物館」が3件であった。第5学年では、「放送局」が6件と最も多く、次いで、「中予水産試験場」が5件、「工場見学」とが4件であった。第6学年では、「考古館」が3件、「埋蔵文化センター」が2件、その他、「生涯学習センター」、「史跡」、「古墳」、「もも畑」、「工場」がそれぞれ1件であった。

「何の教科で社会見学へ行くか」については、第1・2学年は「生活科」で行き、第3～6学年は「社会科」が77.8% (77件/99件中)とであった。「総合的な学習の時間」では21.2% (21件/99件中)あり、中には、第6学年で「生涯学習センター」へは「国語科」と答えた学

校もあった。

以上から、社会見学へは「生活科」もしくは「社会科」で行くという学校がほとんどで、見学場所については、「消防署」や「浄水場」、「ごみ焼却場」など、「生活科」や「社会科」での学習内容に対応していた。また、社会見学へ行く場所が多すぎて書ききれないとの回答があり、実際はより多くの場所への見学や、「総合的な学習の時間」でも社会見学へ行く学校が多いと考えられた。いずれにしても、学習内容に応じて、様々な地域の施設等に出向き、児童が体験を通して学習しているということがわかった。「社会見学」という表現については、「社会見学」や「校外学習」などと表現するという回答もあり、学校によって、表現やカリキュラムの構成に相違点はあるが、どの学校も地域とのつながりを児童に身に付けさせていくために、積極的に「社会見学」を行っていることがわかった。

#### 4. 要約

昭和42年版から平成13年版に発行された小学校家庭科教科書34冊の、衣生活領域の学習内容及び題材内容を分析した結果、以下のことが明らかとなった。

- ・第5学年の領域別掲載量では、「衣生活」は、昭和42年版から60年版までは50%近くを占め、平成3年版から11年版までは減少したものの40%を占めていたが、平成13年版には約29%に減少した。一方、「家庭生活」や「環境」「消費者」は、近年増加してきた。

- ・第6学年の領域別掲載量では、「衣生活」は、昭和42年版には教科書全体の43%を占めており、51年まで

は掲載量が最も多かったが、年々減少し、平成11年版では25%まで減少したが、平成13年版には29%に増加した。一方、「家庭生活」や「環境教育」「消費者」は近年増加してきた。平成11年版では、「地域とのつながり」という学習内容で、「高齢者とのふれあい」や「外国人との交流」、「清掃活動」などが取り上げられた。

・第5学年の衣生活領域における各分野の割合では、「被服製作」が依然として6割を占め多いが、以前よりは減少しており、反対に「衣生活・着方」「被服管理」が増加してきた。

・第6学年の衣生活領域における各分野の割合では、「被服製作」が依然として約7割を占め多かった。第5、6学年で教科書が分かれていた平成11年版までは、次いで「被服管理」が4割近くを占めた。

・第5・6学年の衣生活領域における各分野の割合を比較すると、いずれも「被服製作」の占める割合は圧倒的に多いが、第5学年のほうがより多かった。近年は、「衣生活・着方」は第5学年でより多く、「被服管理」は第6学年でより多く掲載されていた。

・環境教育に関する内容としては、第5・6学年共に、「被服製作」に「リフォーム（再利用製作）」を取り上げ、着なくなったTシャツから、中に古布をつめてクッションを作ったり、使い古したバスタオルやおしぼりの回りを縫ってバスマットを作ったりする例が掲載されていた。

・第5学年の被服製作題材では、昭和42年版～平成13年版までの合計で、「ふくろ」が最も多く、次いで「ボタン付け」「縫いとり」「ティッシュペーパー入れ」であった。これは近年の傾向でもある。「ティッシュペーパー入れ」を含めた「小物」は、昭和54年以降多数取り上げられるようになった。

・第6学年の被服製作題材では、昭和42年版～平成13年版までの合計で、「まくらカバー」及び「つくろい・ほころび直し」が最も多く、次いで「エプロン（前掛け）」「ウォールポケット（壁掛け）」であった。「つくろい・ほころび直し」は、現行学習指導要領で、ほころび直しの内容が削除されたため、平成13年版では「ほつれ直し」として記述されていた。「再利用製作」は、昭和61年度版以降、取り上げられるようになった。その内容は、前述したように、古着のTシャツやバスタオル、おしぼり

から、クッションやバスマットを作ったりするものであった。

・第5学年では手縫いを中心とする小物が多く、第6学年ではミシンを使用し製作時間がかかる「エプロン」や「ウォールポケット（壁掛け）」などが多かった。

松山市内公立小学校の家庭科教師を対象に衣生活領域の授業実践内容に関する質問紙調査を行った結果、以下のことが明らかとなった。

・衣生活領域において最も重点がおかれる分野は「製作（リサイクルを含む）」で、次いで「洗濯（手入れ・整理整頓を含む）」、「着方（衛生を含む）」であった。

・授業での被服製作題材で多かったのは、順に第5学年では「ふくろ」、「マスコット」、「小銭入れ」であり、第6学年では「エプロン」、「ティッシュボックスカバー」、「クッションカバー」であった。

・被服製作物の題材選択方法は、半数近くが「児童が選択している」であり、約半数が「教師・児童それぞれの場合がある」であり、「教師が指定している」はわずかであった。特に、「まくらカバー」、「花瓶しき」、「小物の自由製作」「ティッシュペーパー入れ」、「ショルダーバッグ」については、ほとんどの授業で、児童が自由に選択していた。

・教科書題材以外で必要であると考えられている被服製作題材に、「日本の伝統的な衣装・衣文化」があげられた。

・衣生活領域の授業で指導上の留意点・工夫点等があるとしていたのは、回答者全体の75%であった。その内容は、被服製作実習に関するものが最多で、他に、家庭との連携や基礎基本の技能の定着、リサイクルに関するもの、インターネットの活用等があげられていた。削減された授業時数の中で知識・技能の習得を図りたい教師の思いがうかがえた。

・平成10年度改訂小学校学習指導要領の変更6点に対する評価は、「題材の設定を見直し、地域や学校、児童の実態に応じて題材や教材を選択できるようにしたこと」への評価が最も高く、「『ほころび直し』の内容削除」への評価が低かった。

・衣生活領域と他教科との関連では、28校中3校が「総合的な学習の時間」とクロスカリキュラムを組んでいた。授業内容は製作実習を含み、贈り物や卒業制作としてい



た。

・第5・6学年の「総合的な学習の時間」で、衣生活領域以外で実践している主な授業内容は、「環境に関するもの」が最も多く、「国際理解」や「福祉」のような、「総合的な学習の時間」の内容として学習指導要領に例示されている内容が多かった。家庭科と関連した内容では、米や野菜を栽培し、調理するという食生活領域での実践が多かった。

・社会見学へ行く教科は、社会科や「総合的な学習の時間」、生活科が多かった。見学場所は、社会科や生活科などの学習内容と対応した、消防署や浄水場、ごみ焼却場、放送局など多数の回答があった。学校では、地域とかわりながら、体験を通して学習することに積極的であることがわかった。

## 5. まとめ

本研究では、衣生活分野での総合的な学びを可能にする題材や、衣生活分野と「総合的な学習の時間」を関連づけた題材を開発するための基礎資料を得ることを目的として、小学校家庭科教科書の記述内容の分析と、松山市内小学校での授業実践に関する調査を行った。

教科書の分析結果から、衣生活領域の各分野の割合では、「被服製作」は依然として多いが近年減少しており、「家庭生活」や「環境」「消費者」「地域とのつながり」が増加してきた。しかし、小学校家庭科教師への調査から、教師は被服製作に重点を置いていた。「家庭生活」や「環境」「消費者」「地域とのつながり」を融合させた被服製作の授業を開発していくことが必要ではないかと考えられる。

「環境教育」と関連づけたアクリルたわしの製作や、リフォームなどはすでに報告されているが、さらに題材開発が求められる。

さらに総合的に学ぶ題材としては、「綿花の栽培、糸紡ぎ、布作り、小物づくりや染色」や、「洗濯、洗剤、生活排水、水環境」などが考えられる。「総合的な学習の時間」と関連づければ、草花の観察や活用、生産から消費までの総合的な経済システム体験、郷土の特産品とのかかわりなど、理科や社会科などと連携しながら、さまざまな活動をとおした多様な学びが可能である。

その他、体育祭や文化祭、施設訪問などの行事と関連

させたものづくり、平和や人権について学ぶ一環としてのパッチワークキルト、伝統や文化とほころび直しを関連させた刺し子なども考えられる。また、愛媛県の地域性を考えると、かんきつ類やタオル、緋などの教材化も検討すべきことである。

第2報では、愛媛県に生活する子どもたちにとって身近な素材であるかんきつ類による染色の題材開発を検討している。身近な素材による染色は、染色の科学性や布や染料の成り立ち、加工の工程や意義などのように、子どもの活動を多様なものにすることができると考えられている<sup>14)</sup>。しかし、地域特産物での染色が、学校教材として十分に研究されているとはいえない。地域の独自性あふれた学校教材の開発には、十分な基礎的な実験や研究が必要である。

今後は、地域の特産品や伝統工芸などを教科書題材と融合させるなどして、学校教育と地域とが連携し、子どもの学びをひろげながら基礎を定着させることができるような題材の提案をしていきたいと考えている。

## 引用・参考文献

- 1) 日本家庭科教育学会編：「家庭科教育50年—新たな軌跡に向けて—」，建帛社，2000，p.60，63～70
- 2) 田中陽子：「明治期における小学校の和裁教育—教授書・教科書よりみた内容及び方法—」，日本家庭科教育学会誌，39（3），p.1～6（1996）
- 3) 田中陽子：「明治・大正期の小学校裁縫科教授法（第1報）—裁縫科教授定型過程と実践上の問題—」，日本家庭科教育学会誌，42（2），p.31～38（1999）
- 4) 田中陽子：「明治・大正期の小学校裁縫科教授法（第2報）—教授法重視の影響—」，日本家庭科教育学会誌，42（2），p.39～46（1999）
- 5) 田中陽子：「明治・大正期の小学校裁縫科における洋裁技術の受容—和裁への対応—」，日本家庭科教育学会誌，42（3），p.17～24（1999）
- 6) 田中陽子：「明治・大正期の小学校裁縫科教授法（第4報）：手工科教授との関連」，日本家庭科教育学会誌，43（3），p.193～198（2000）
- 7) 田中陽子：「大正自由教育の小学校裁縫科教授法への影響と限界」，日本家庭科教育学会誌，46（2），p.103～113（2003）

- 8) 田中陽子：「大正後半期から昭和初期小学校裁縫科教材論」, 日本家庭科教育学会誌, 46 (3), p.207～215 (2003)
- 9) 田結庄順子・吉原崇恵・柳昌子：「第4章第7節 被服」, 田結庄順子編著『戦後家庭科教育実践研究』, 梓出版社, 1996, p.325～342
- 10) 田結庄順子・西丸理恵：「第2章第3節 結果の概要と考察」, 前掲9) p.112～113, 135
- 11) 綿引伴子・杉村桃子：「家庭科教育関係雑誌における衣生活の教育実践」, 金沢大学教育学部附属教育実践総合センター 教育工学・実施研究, 30, p.35～44 (2004)
- 12) 文部省：「小学校学習指導要領家庭科編」, 平成10年発行
- 13) 家庭科教育研究者連盟編：「男女が学ぶ家庭科の授業 小学校篇上巻」, 大月書店, 1995, p.109～130
- 14) 野田文子ほか：「小学校総合的な学習の時間におけるたまねぎ染色の実践」, 生活文化研究, 44, p.33～41 (2004)